



Title	数量詞を含む同格構造についての再検討：同格名詞句との比較から
Author(s)	眞野, 美穂
Citation	現代日本語研究. 2022, 14, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

数量詞を含む同格構造についての再検討

—同格名詞句との比較から—

Re-examining Appositive Numeral Quantifiers in Japanese in Comparison to
Appositive Noun Phrases

眞野 美穂

MANO Miho

キーワード：数量詞，同格構造，同格名詞句，指示機能

要 旨

本稿は、「子ども 三人」のような数量詞を含む同格構造が、「我々 学生」のような他の同格名詞句とどのような共通点や相違点を持つかを明らかにすることを目的とする。数量詞を含む同格構造が，同格名詞句と同様の性質を持つこと，そして同格構造としてどのように位置づけられるかを論じた上で，これまで数量詞研究で議論されてきた問題を同格構造全体の問題として捉え直す可能性と，それが同格構造のさらなる解明につながる可能性を示す。

1. はじめに

本稿の目的は，数量詞を含む同格構造 (appositive numeral quantifiers) を，他の同格名詞句と比較することで，その性質を明らかにすることである。

日本語では，数詞と助数詞からなる「三人」のような数量詞は，(1a)のように名詞句を修飾し数量を指定するだけでなく，(1b)のように単独で名詞句としても働くことができる。

(1) a. 三人の子どもがやってきた。

b. 三人がやってきた。

そして，これら数量詞は，(1)や(2)のような様々な統語的位置に現れることが知られている。

- (2) a. 子ども 三人がやってきた。
 b. 子どもが三人やってきた。
 c. 子どもの三人がやってきた。

(3b-c)から分かるように、一般的な名詞句は(2a-b)のような統語位置に生じることは許されないことから(ただし、(3c)の「子ども集団」が複合語である場合は除く)、数量詞は一般的な名詞句とは異なる性質を持つと考えられてきた。

- (3) a. 集団の子どもがやってきた。
 b. *子どもが集団やってきた。
 c. *子ども 集団がやってきた。

(2a)では、数量詞が数量を指定する対象である名詞句と並置されており、同格の構造として(奥津 1969 他)、(2b)では数量詞が外置されることから、数量詞遊離(quantifier float)の現象として(井上 1978 他)、これまでさかんに研究が行われてきた。

このうち、同格構造については、数量詞遊離構造と連体修飾構造の解釈の差異や統語構造についての研究が多い(詳しくは、3.2節参照)。その中で、これら数量詞を含む同格構造が、「我々 学生」や「首都 東京」のような、複数の名詞句からなる同格構造(以下、「同格名詞句(appositive nominal phrases)」と呼ぶ)と類似性を持つことは指摘されてきたが、具体的にどのような相違点があるかを論じた研究は未だ少ない。本稿では、数量詞を含む同格構造の特徴を、同格名詞句と比較することで明らかにし、それにより、これまで数量詞研究の中で論じられてきた問題を、同格構造全体の問題として捉え直す可能性について示したい。

2. 数量詞を含む同格構造と同格名詞句構造

本節では、数量詞を含む(2a)のような構造が、他の同格名詞句と同様の同格構造であることを改めて示し、その体系の中にどのように位置づけられるかを検討する。

2. 1. 数量詞を含む同格構造

数量詞を含む同格構造が、一種の同格名詞句構造であるという指摘は奥津

(1969)ですで行われている。宇都宮(1995)も「課長 島耕作」のような同格名詞句との類似性を指摘し、「名詞に後置されるものの条件は、①名詞的であること、②後置される名詞に固有名詞が多いのと同じように、後置される数量詞は特定されているものであること、が考えられよう。(p. 8)」と述べている。しかし、同格名詞句については十分研究が行われないうまま、類似性が指摘されているという問題があった。そこで本稿では、同格名詞句の特徴を先行研究に基づきまとめた上で、数量詞を含む場合と比較する。

まず、数量詞を含む(2a)の構造が、同格名詞句と同様の同格構造であることを確認する。眞野(2016)では、同格名詞句について、(4)のような必要条件を提案した。

(4) 同格名詞句の必要条件 (眞野 2016: 27)

- a. (音) アクセントが一語化しないもの
- b. (格) どちらかの名詞句を削除しても文法的であるもの
- c. (意味) 指示対象が同じであり、片方の名詞句を削除しても文の意味が変わらないもの

数量詞が含まれる場合も、(5)から分かるようにアクセントは一語化しておらず、(6)に示すように、片方を削除しても文法的であり、文の意味は変わらないため、この条件をすべて満たしている。

(5) こ ども さん に ん がやってきた。

(6) {子ども／三人} がやってきた。

そのため、本稿では、数量詞を含む場合も同格名詞句と同様の同格構造であると考えられる。

同格名詞句の先行研究(小林 1996, 眞野 2016, 2020a, b, 森山 2016)では、そこに生じる各名詞句が同じ指示対象を持つとはいえ、語順には制限があることが指摘されている。同格名詞句に生じる名詞句の中でも、人称代名詞や指示詞を含む「ダイクシス名詞句(眞野 2020a, b)」(森山(2016)における「境遇語」に相当¹⁾)は、「NP1 NP2」という2つの名詞句からなる同格名詞句構造において、(7a)のように、必ず NP1 の位置に生じなければならない(小林 1996, 眞野 2016, 2020a, b, 森山 2016)。

(7) a. 我々 学生は学ばなければならない。

b. *学生 我々は学ばなければならない。

一方, (8)のような「再帰代名詞類」は, 先行する名詞句が先行詞になるため, (8a)のように, NP2 の位置にしか生じることができない(眞野 2016, 2020a, b)。

(8) a. 田中さん {ご本人／ご自身} が登壇された。

b. * {ご本人／ご自身} 田中さんが登壇された。

同格名詞句として生じることができるその他の名詞句は, 共起する名詞句の種類によって, 両方の位置に生じる可能性がある(眞野 2020a)。例えば, 「祖国」という名詞句は, ダイクシス名詞句と生じた場合は NP2 の位置に(9a), 固有名詞と共起した場合は NP1 に生じる(9b)。

(9) a. {ここ 祖国／*祖国 ここ} によろやく帰ってきた。

b. {祖国 日本／*日本 祖国} によろやく帰ってきた。

これら語順の詳細は 2.3 節で論じることにするが, まずは数量詞の基本的な語順について, ここでは確認する。数量詞を含む同格構造の場合, 基本的には(10a)のように, 数量詞が NP2 に現れる語順しか許されない。

(10) a. [子ども 三人]が行くことになった。

b. * [三人 子ども]が行くことになった。

(10b)の語順は, 間にポーズを置けば許容されるように思えるかもしれないが, これは単に数量詞が外置されているだけであって, 同格構造として許されるわけではない。このことは, 名詞句と数量詞の間に他の要素を挿入できるかどうかにより, 確かめることができる。同格構造では(11a)のように, 間に「明日」を挿入できないのに対し, (10b)については, (11b)のようにそれが許容される。

(11) a. *[[子ども 明日 三人]が] 行くことになった。

b. [三人] [明日] [子どもが] 行くことになった。

つまり, (11b)では「三人」と「子ども」は, [] で示すように異なる構成素であり, 同格構造は成していないと考えられる。このように, 数量詞は同格構造において, 基本的に NP2 の位置に現れることが確認できた。以降, 同格構造として許容されない場合は, 同格の部分を [] で括った上で, アスタリスク (*) を付すこととする。

2. 2. 数量詞の意味的階層構造における位置づけ

同格名詞句内の名詞句間の意味関係について、小林(1996)は、「N2 は具体的な実体を示し、N1 はそれを引き立て強調するために添えられたもの、意味の主眼は N2 で、N1 はそれを修飾または補うもの (p. 8, N1, N2 はそれぞれ本稿における NP1, NP2 に対応する)」としている。森山(2016)も同様に、「意味の中心は最後部の名詞にあり、名詞並置型の同格構造は、最後部の名詞を本体名詞（主要部）とする内心構造と考えてよい。(p. 68)」と述べ、後ろの名詞を主要部と考えている²⁾。

さらに、眞野(2016, 2020a)は、再帰代名詞類などが具体的な対象を表す名詞句の後方に生じることを指摘し、(12)のような意味的階層構造と、属性に親族名称や別称を含めることで簡略化した、(13)の構造を提案している。(12)の非飽和名詞とは、「祖国」のように「x の (祖国)」というパラメーターの値が設定されない限りそれ自体で意味が充足しない名詞 (cf. 西山 2003)、である。

(12) 同格名詞句の意味的階層構造：

ダイクシス名詞句・状態＋非飽和名詞＋属性（その他）＋親族名称（呼称不可）＋属性（肩書き：呼称可）・別称＋具体的対象（固有名詞）＋親族名称（呼称可）・属性（肩書き：呼称可）＋再帰代名詞類

(眞野 2020a: 82)

(13) 【ダイクシス【非飽和名詞【属性【具体的対象】属性】】再帰】

(同：84)

これらの先行研究は、いずれも名詞句のみで構成される同格構造を対象としていることから、数量詞を含む場合については検討していない。数量詞はどのように位置づけられるのだろうか。

前節で、数量詞は、「子ども」という属性を表す名詞句と同格構造を成した場合、後部要素（NP2）として生じることを示したが、この語順は、(14)のように代名詞や固有名詞と共に生じた場合も同じである。

(14) a. {彼ら 三人}/*三人 彼ら} が担当する。

b. {[田中さん 三人]/*三人 田中さん} が同じクラスになった。

また、固有名詞と同格名詞句を構成した場合、その前後両方に生じることができる(15)にあげる「夫人」のような親族名称や、「店長」のような属性について

も、数量詞と共に生じた場合は、NP1の位置にしか生じることができない。(16)の例のように、この場合も数量詞はNP2に生じることになる。

(15) a. {[夫人 田中陽子]／[田中陽子 夫人]} がやってきた。

b. {[店長 加藤]／[加藤 店長]} がやってきた。

(16) a. {[夫人 三人]／*[三人 夫人]} がやってきた。

b. {[店長 三人]／*[三人 店長]} がやってきた。

「自ら」のような再帰代名詞類と数量詞の語順はどうだろうか。この2つのみで同格構造を作るとは困難であるものの(困難である理由は、次節で示す)、(17a)から分かるように、数量詞がNP1の位置に生じる語順の方が許容度が高い。また、(17b)のように、もう一つ別の名詞句を共起させた場合、より許容度があがる。

(17) a. {?[三名 自ら]／*[自ら 三名]} が問題を指摘した。

b. {[議員 三名 自ら]／*[議員 自ら 三名]} が問題を指摘した。

このことから、数量詞は、(18)のように位置づけられ、(19)のようにその構造を示すことができると考える。

(18) 同格名詞句の意味的階層構造(改訂版)：

ダイクシス名詞句・状態＋非飽和名詞＋属性（その他）＋親族名称（呼称不可）＋属性（肩書き：呼称可）・別称＋具体的対象（固有名詞）＋親族名称（呼称可）・属性（肩書き：呼称可）＋数量詞＋再帰代名詞類

(19) [[ダイクシス [非飽和名詞 [属性 [具体的対象] 属性]] 数量詞] 再帰]

眞野(2020a)は、発話時に位置づけられるダイクシス名詞句のような名詞句は外側に生じ(注2)も参照のこと)、具体的対象を表す名詞が持つ個別的特性を表すものはその名詞句の近くに生じることを指摘しているが、数量詞が(19)の位置に位置づけられることも、その説明に矛盾するものではない。対象の数量は、対象自体の持つ個別的特性ではなく、発話時に位置づけられる存在指示的なものであるためである。そのため、ダイクシスと同じ階層に位置づけられるものと考えられる。

2. 3. 同格構造における数量詞の機能

眞野(2020b)は、同格名詞句構造には少なくとも一つ、指示機能を担う名詞句

が必要であることを指摘している。(20)のように指示機能を担う固有名詞やダイクシス名詞句を含む場合は問題ないが、指示機能を文脈なしでは担いにくい、例えば属性を表す名詞句のみからなる同格名詞句構造は、(21)のように許容されないためである。

(20) a. { [店長 加藤] / [加藤 店長] } がやってきた。

b. [彼ら 日本人] には分かってもらえない。

(21) a. { * [店長 女性] / * [女性 店長] } がやってきた。

b. { * [父 日本人] / * [日本人 父] } には分かってもらえない。

数量詞の場合、興味深いことに、もう一方の名詞句は指示機能を持つ名詞句(22a)でも、(22b)のようにそうでなくても良い。

(22) a. [{ 彼ら / 田中さん } 三人] がやってきた。

b. [{ 店長 / 女性 / 日本人 } 三人] がやってきた。

ただし、前節で見たように、他方が再帰代名詞類の場合は、許容度が低い。

(23) ? [三名 自ら] が問題を指摘した。 (= (17a))

しかし、この場合も、以下のような文脈を想定すると、許容されるようになる。

(24) 調査委員会には、今回問題があったとされる工場の従業員も三名含まれていた。第一回検討委員会では、[三名 自ら] が、その工場内部の問題を報告した。

(24)では、数量詞が先に導入された「従業員の三名」を指示しており、その指示対象は明確である。この場合、問題なく再帰代名詞と共に同格構造を作ることができる（「(その) 三名 自ら」と解釈されていると考えられる）。つまり、数量詞は、同格構造の中で、指示機能を担いうるものであると言える。このことは、(1b)にあげたような、(指示機能を担う) 単独での数量詞の使用を考えても、当然のことである。しかし、このような振る舞いは、その他の同格名詞句では見られず、どのような文脈を考えても、(21)のような同格構造は許容されないと考えられる (cf. 眞野 2020b³⁾)。

眞野(2020b)では、同格名詞句を、それを構成する名詞句の性質から、表1のように分類した。

表 1 : 同格名詞句の分類 (眞野 2020b: 85)

機能 \ 名詞句	NP1	NP2
指定	指示性を帯びた名詞句	属性を叙述する名詞句
指定	属性を叙述する名詞句	指示性を帯びた名詞句
同定／同一性	指示性を帯びた名詞句	指示性を帯びた名詞句

名詞句が属性や状態を叙述しうるものかどうかについては、(25)のように、「NP1 の／である NP2」に言い換えが可能かどうかにより、確認している。

- (25) a. *我々の／である日本人 (人称代名詞)
 b. 長男の／である梅之進 (親族名称)
 c. 藩主の／である重定 (属性 肩書き)
 d. 隣国の／である美濃 (非飽和名詞)
 e. 首位の／である近鉄 (状態)

(眞野 2020b: 80 から一部抜粋)

(25b-e)ではそれぞれ、言い換えが可能であることから、NP1 が属性を叙述する名詞句であると判断された。そして、(25a)のようにダイクシス名詞句で言い換えができないことは、ダイクシス名詞句が基本的に指示的なものであり、叙述的な性質を持たないことに起因しているとした。

数量詞が NP2 に生じた場合も、同様の振る舞いが観察される。

- (26) a. 我々 {#の／*である} 三人
 b. 長男の／である三人
 c. 藩主の／である三人
 d. 隣国の／である三国
 e. 首位の／である三人

(26b-e)から、NP1 が叙述的な性質を持ち (つまり、属性を叙述する名詞句であり)、数量詞がその数量の「指定」を行う関係であることが分かる。一方、(26a)の「我々 三人」のように、NP1 がダイクシス名詞句の場合は、両方の名詞句が指示性を帯びた名詞句ということになり、そこで (数量の)「同定」が行われる関係となる (表 1 参照)。ここでは、「我々」の数量は必ず「三人」と解釈される⁴⁾ (解釈については、3.2 節を参照)。

本節では、数量詞を含む同格構造も同格名詞句と同様の性質をもつものであることを示し、その体系の中にどのように位置づけられるかを検討した。第3節では、数量詞研究で行われてきた議論が、どのように同格構造全体の問題として考えられるかを見る。

3. 数量詞研究との関係

3. 1. 同格構造に生じる数量詞

同格構造に生じることのできる数量詞には制限があることが、先行研究で明らかになっている。(27b)に観察されるような差異である。

(27) a. {2 台の/2000cc} の車を買った。

b. 車 {2 台/*2000cc} を買った。

神尾(1977), 奥津(1983, 1996a, b)は、これらの数量表現を区別し、奥津はそれらを「数量 Q」と「属性 Q」と呼んだ。「数量 Q」は、対象名詞の数を数量詞が数えているものであり、(27)の「2 台」のようなものである(本稿でこれまで見てきたものはすべて「数量 Q」にあたる)。一方、「属性 Q」は、(27)の「2000cc」のように、共起する対象名詞の数を数量詞が数えていないと考えられるもので、同格構造には生じることができない。

属性 Q の解釈になるか数量 Q の解釈になるかについては名詞句と数量詞の関係が重要であり、西山(2003)は、その解釈に語用論的知識が介入することを指摘した。岩田(2008)はさらにそれを発展させ、属性 Q を、2つのタイプに区別した。タイプ1は、「属性の種類を補完が必要な属性 Q」であり、名詞との関係から意味を読み込んで属性 Q という解釈が出てくる(28a)のようなものである。タイプ2は、「全体数の補完が必要な属性 Q」であり、連体修飾した場合、Q が名詞の全体数という解釈になる、(28b)のようなものである。

(28) a. (排気量) 2000cc の車, (体重) 200 キロの力士, (高さ) 300 メートルの東京タワー

b. (全部で) 10 段の階段, (全部で) 100 ページの本, 300 室のホテル
(岩田 2008: 72)

同格構造で興味深いのは、タイプ1では(29)のように同格構造が許されないのに対し、タイプ2では(30)のように許されることである。例えば(30a)では、

(のぼった) 階段が 10 段であると解釈される。

(29) a. *[車 2000cc]を買った。 (=27b)

b. *[力士 200 キロ]がやってきた。

c. *[東京タワー 300m]が見える。

(30) a. [階段 10 段]をのぼった。

b. [本 100 ページ]を読んだ。

c. [ホテル 300 室]が (すべて) 予約でうまっている。

このことは同格構造の特徴と合わせて、考えることができる。同格構造は、基本的に同一の対象を指す名詞句または数量詞から構成される。同格名詞句の場合、先に見たようにある程度限定的な名詞句 (例えば, (18) のような意味を表す名詞句) にしか同格名詞句構造は作れないことが分かっている。指示対象の一部の側面しか表さないような名詞句や, あまりに広い指示対象を持つ名詞句は, 例えば, 表 1 の「措定」のタイプとして, (31) のような同格名詞句を作っても, 許容されない⁵⁾。

(31) *[加藤 {金髪／人間}] がやってきた。

これは, NP2 が NP1 の属性を表すことができたとしても, 同一の指示対象を指す名詞句としては解釈することが難しいためだと考えられる。つまり, 数量詞に見られた差異は, 数量詞だけではなく同格構造全体の問題として, 再検討される必要がある。同一の指示対象 (もしくはその数量) を指す名詞句 (または数量詞) として捉えられるのはどのような範囲なのか, という観点から見る必要があるだろう。ダイクシス名詞句と組み合わせた「我々 人間」のような例が許容される理由を含め, この問題については, 稿を改めて検討したい。

3. 2. 数量詞を含む同格構造の解釈

先に述べたように, 数量詞については, 生じる位置と解釈について, これまで盛んに議論が行われてきた。井上(1978)は, (32) のような例をあげ, 連体修飾の(32a)では前を走っていた車は二台であったと解釈されるのに対して, 数量詞遊離した(32b)では前を走っていた車は二台以上あり, そのうちの二台がつかまったと解釈されることを指摘している。

(32) a. [前を走っていた二台の乗用車]がつかまった。

b. 前を走っていた乗用車が二台つかまった。 (井上 1978: 175)

以降の数量詞遊離に関する議論においてもこの解釈の差異は重要な論点となっているが、本稿で対象とする同格構造の場合の解釈はどうだろうか。岩田 (2013) は、数量詞遊離と同格構造での解釈を (33) のように示し、(33b) のような同格構造 (NQC 型) では、数的情報に重点が置かれており、必ず三人という解釈になることを指摘する。

(33) a. 昨日会った学生を三人招待した (NCQ 型)

→昨日会った学生 $\geq$ 三人

b. 昨日会った学生三人を招待した (NQC 型)

→昨日会った学生 = 三人

(岩田 2013: 95)

そして、関係節を含まない「学生 三人」においても、均質な (全て学生である) 三人からなる集合を表すことを主張している。

この解釈についても、同格名詞句を含め、集合的な観点から検討する余地がある。「私 眞野」のような同定機能を持つ同格名詞句や、「長男 梅之進」のような指定の同格名詞句の場合は同一指示対象を持つ集合を考えることで、問題なく捉えることができそうである。しかし、(34) のような数量詞と同格名詞句の解釈の相違はどのように説明することができるだろうか。

(34) 昨日会った[彼ら {三人／日本人}]が、今日も同じ場所にいる。

それぞれの特徴を明らかにするためにも、数量詞を含む同格構造と同格名詞句を比較する必要があることが示唆される。

4. おわりに

本稿では、数量詞を含む同格構造について、同格名詞句と比較することで、その特徴と同格構造内での位置づけを検討した。また、これまで数量詞研究で議論されてきた問題を、同格構造全般の問題として検討することで、それぞれの言語現象の解明がさらに進む可能性を示した。

同格構造については未だ多くの課題が残されている。形態素を介在せず、2 つの要素が並ぶという手がかりの少ない構造を探るためには、それを構成する

それぞれの名詞句や数量詞の持つ特性の調査が不可欠である。今後の課題としたい。

注

1) 「境遇語」とは、境遇性 (deixis) を持つ語のことを指す。

2) 森山(2016)は、同格構造を、「例示同格：メンバー例を本体名詞に前置」・「境遇語同格：メンバー例を本体名詞に前置」・「別称同格：タイトルや言い換えを表す名詞を本体名詞に前置」に分類し、例は(i)のような例をあげ、(ii)のような順序性の傾向があることを指摘している。

(i) [田中, 佐藤, 鈴木など][彼ら][仕事人集団][新商品開発チーム]は、新商品を開発することに成功した。(森山 2016:68)

(ii) 例示同格・境遇語同格＋別称同格＋後置される本体名詞 (同上)
この順序には、情報のアクセスが関わっており、例示や境遇語という情報のアクセスを行うものが先行し、本体名詞の意味づけを行う別称がその直前に来ると述べている。

眞野(2020a)は、このうち「例示同格」は対象としていないが、それ以外の順序については、森山(2016)の提案する順序性と矛盾するものではない((12)の下線部は、森山(2016)の「別称同格」に相当すると考えられる)。

3) 眞野(2020b)では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)を利用し、NP1, NP2 の名詞句の分類を「普通名詞」に限定した検索を行い、ランダムに 2000 件を 2 回抽出し、同格名詞句の構造を調査しているが、同格名詞句の条件を満たすものは見つからなかったことが報告されている。

4) この同格構造の解釈は、名詞句が必ずしも数量詞の表す数量でなくてもよい、「彼らは三人参加した」のような、数量詞遊離の場合とは異なる。

5) 「指定」のタイプでは、次のように問題なく同格構造が成立する。

(iii) [{金髪／長身} 加藤]がやってきた。

参考文献

井上和子(1978)『日本語の文法規則』大修館書店

- 岩田一成(2008)「属性 Q と日本語助数詞の体系」『日本語文法』8(1), pp. 68-84
- 岩田一成(2013)『日本語数量詞の諸相—数量詞は数を表すコトバか—』くろしお出版
- 宇都宮裕章(1995)「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』87, pp. 1-11
- 奥津敬一郎(1969)「数量的表現の文法」『日本語教育』14, pp. 42-60
- 奥津敬一郎(1983)「数量詞移動再論」『人文学報』160, pp. 1-24
- 奥津敬一郎(1996a)「連体即連用? 第 3 回 数量詞移動」『日本語学』15(1), pp. 112-119
- 奥津敬一郎(1996b)「連体即連用? 第 4 回 数量詞移動」『日本語学』15(2), pp. 95-105
- 神尾昭雄(1977)「数量詞のシンタックス」『月刊言語』6(8), pp. 83-91
- 小林幸江(1996)「「同格」をめぐって」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』22, pp. 1-13. 東京外国語大学
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 眞野美穂(2016)「日本語同格名詞句についての一考察—固有名詞が含まれる場合—」福田嘉一郎・建石始(編)『名詞類の文法』, くろしお出版, pp. 21-40
- 眞野美穂(2020a)「日本語同格名詞句に見る意味的階層と統語構造についての一考察」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂(編)『統語構造と語彙の多角的研究』開拓社, pp. 73-87
- 眞野美穂(2020b)「同格名詞句における各名詞句の役割」由本陽子・岸本秀樹(編)『名詞をめぐる諸問題』開拓社, pp. 70-87
- 森山卓郎(2016)「名詞並置型同格構造」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己(編)『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp. 65-82

付記

本稿は、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究 (C)「日本語名詞の意味機能と統語的特性:同格名詞句と文法化現象からの検証」(18K00615) の研究成果の一部である。

(人文学研究科准教授)